



令和6年8月1日

**新生児検査で免疫不全が判明、移植手術を受けた男児が退院します。  
広島大学病院と広島県、広島市連携による初の事例****情報提供**

広島大学病院と広島県、広島市が連携して実施している新生児マススクリーニング検査（NBS）により、無症状だった男児を重症複合免疫不全症（SCID）と診断しました。その後、造血細胞移植手術を行い、元気になって8月3日に退院します。広島大学病院は、令和4（2022）年7月に、SCIDをNBSの対象に加える試験研究を始めており、県内でこれまでに2万8000件以上実施しています。今回は、その初めての事例です。これらの取り組みや患者の経過について記者会見をします。ぜひご参加ください。

**記**

日時：令和6年8月2日（金）14時00分～15時00分（受付13時30分～）

場所：広島大学病院臨床管理棟3階大会議室（広島市南区霞1-2-3）

出席者：広島大学病院小児科 岡田 賢(おかだ・さとし)教授  
広島大学原爆放射線医科学研究所 浅野孝基(あさの・たかき)准教授  
広島県健康福祉局子供未来応援課 南 亮介(みなみ・りょうすけ)課長  
広島市こども未来局こども青少年支援部 野瀬澄子(のせ・すみこ)  
母子保健担当課長

**【経過】**

2022年9月生まれの男児（現在1歳10か月）が、生後間もなくNBSを受け、SCIDと診断され2023年10月、広島大学病院に入院。同年11月に臍帯血による造血幹細胞移植手術を受けました。移植に伴う合併症の治療が長引きましたが、症状が落ち着き、退院されることになりました。今後は内服治療を継続しながら、外来フォローにて成長を見守っていく方針です。

**【取材について】**

男児の撮影は可能で、ご両親のコメントは用意します。ご両親のお顔の撮影はご遠慮ください。ご配慮のほどお願いします。

※重症複合免疫不全症（SCID）＝生まれつき免疫細胞がうまく働かず、さまざまな感染症にかかりやすい病気。成長につれ感染症にかかり重症化する。生ワクチン接種にて重症化する例もある。NBS で発見できれば、造血細胞移植により 90%で根治が期待できる。発症頻度は5万人当たり1人程度

※新生児マススクリーニング検査（NBS）＝先天性免疫異常、先天性代謝異常やホルモン分泌の異常など発育に影響する可能性のある疾患について、早期に発見し適切な治療を開始するための検査。希望者を対象に生後5～7日の赤ちゃんの足裏から少量の血液を採取し、専門機関で分析する。

【お問い合わせ先】

広島大学大学院医系科学研究科 小児科学  
Tel：082-257-5212（平日9：00～17：00）

発信枚数：A4版 3枚（本票含む）



(別紙)

【FAX返信用紙】

FAX：082-424-6040

広島大学 広報室 行

記者説明会（8月2日（金）14時00分開始・霞キャンパス）のご案内

新生児検査で免疫不全が判明、移植手術を受けた男児が退院します。  
広島大学病院と広島県、広島市連携による初の事例

日 時：令和6年8月2日（金）14時00分～15時00分

場 所：広島大学霞キャンパス 臨床管理棟3階大会議室

ご出席

貴社名：\_\_\_\_\_

部署名：\_\_\_\_\_

ご芳名：\_\_\_\_\_（計 人）

電話番号：\_\_\_\_\_

メールアドレス：\_\_\_\_\_

※誠に恐れ入りますが、取材いただける場合は、

上記にご記入頂き、8月2日(金)10時までにご連絡ください。